

子連れ出勤とおっぱいが 日本を救う！

社会や時代を
編集するという視点を大切にしたい



みつ は た ゆ か
光畑 由佳氏
有限会社
モーハウス
代表取締役

略歴 お茶の水女子大学を卒業後、美術企画、建築関係の編集者を経て、平成9年の2人目の出産後、電車の中での授乳体験を機に「産後の新しいライフスタイル」を提案するため授乳服の製作を開始。その後、お産・おっぱいをサポートする「モーハウス」の活動を始め、「子連れ出勤」を古く新しいワークスタイルとして提唱・実践し、多様な生き方や育て方、働き方を提案する「子連れスタイル推進協会」や、母乳生活全般の研究活動を行う「快適母乳生活研究所」を立ち上げる。三児の母。趣味はお産・おっぱい・建築。



有限会社モーハウス
平成9年に創業。母となった女性のライフスタイルをより自由なものに変えていくことを志し、授乳服という“ツール”を用いてビジネスと社会活動の両輪で取組を展開している。従業員の多くが子どもを持つ女性であり、子育てという「制約」を多様な工夫で乗り越えながら円滑な業務実施体制を築くとともに、社員の継続的なキャリア構築を支援している。

年表

22歳
美術・建築系の編集の仕事に携わる

30歳
フリーの編集者に

33歳
次女を出産。授乳服製作のモーハウスを設立

41歳
東京青山にショップを開業。愛・地球博で授乳ショーを行う

44歳
平成21年度(第6回)女性のチャレンジ賞受賞

48歳
NPO法人子連れスタイル推進協会設立

49歳
平成25年度ダイバーシティ経営企業100選受賞。APEC(北京)で、日本の女性起業家を代表してスピーチ

普通の主婦が、
気がついたら起業していました

最近の傾向として、社会起業家やアントレプレナーに注目が集まっているということもあり、私はその担い手として紹介されることもあるのですが、実は、自分としてはピンと来ていないんです。基本は主婦なので、あまりリスクがあることはやりたくないですし、起業するぞ！と意を決して、モーハウスの事業を始めた訳ではないのです。

次女が生後間もなくの時に、つくばから東京に移動している途中、中央線の車内でお腹がすいてどうしても泣き止まないで、思わずその場で授乳したという体験がありました。今思えば、一度電車を降りるとか、いろいろ選択肢はあったと思うのですが、その時は、もうそうするしかありませんでした。そんな経験をしたので、外出先でもおっぱいをあげることができる服があったらいいのと思いき、まず、市販品を探してみました。しかし、授乳する時に胸がちんと隠れる商品が見つけれなかったのです。それならまずは自分で作ってみよう、軽い気持ちで始めたというのが事の真相なのです。しかし、私には実際にモノを作る技術がありません。そこで、周囲の人に、授乳時以外は胸が見えない服があったらいいなと思っていると話すようになりました。そうすると、なんか面白そうだから手伝うよという、専門家の方が、それぞれ集まって来てくれて、気がつくにつれて試作品作りをはじめ、試行錯誤を繰り返して

う。もともと私自身もスタッフも0歳の子を連れて仕事をしていました。それに対する新聞での取材がきっかけで、このスタイルの発信を続けています。

きつと、私の気持ちの中に、モーハウスという事業を通して、時代や社会を編集したいと思っているんでしょうね。ある意味、モーハウスは、メディアなのかもしれないですね。実際に、子連れ出勤の話も聞いて、実は親の介護で悩んでいます。自分は親連れ出勤をしないと、とある男性の方が話してくれたりしました。これは嬉しかったですね。親連れ出勤という新しい視点が誕生したのです。

また、授乳服の次に、子どもがおっぱいをほしがるときに、素早くおっぱいをあげることが出来るような授乳用のブラも開発しましたが、それを、乳がんと患った方が使いたいとおっしゃってくださいました。開発時にはそこまでは気がつきませんでした。乳がんの患者さんにとっては、切除した後の傷口がどうしてかデリケートで痛むため、素材の優しさや傷口に当たらないということ、これがいいと逆に新しい使い方を教えていただきました。誰かの為にと考え抜いて丁寧に作ったものが、別の方のニーズにも合うということ、まさにそのプロセスやプロダクトが、ユニバーサルデザインであるということに気づかせていただきました。これもまた、新しい社会の見方だと思えます。

おっぱいをきつかけにして
もっとみんな自由になってほしい

平成26年5月のAPEC女性と経

ながら、第一号の授乳服を販売するまでの期間が、実は、驚くことに4か月くらいだったんです。きつと、私に強いリーダーシップがないので、手伝ってあげないと、みなさんが思ってくれたんだと思います。前職で編集の仕事をしていたので、自分が出来ないかわれば、出来る人を探して頼めばいいということとが素直に出来たからかもしれません。以来、ずっとそんな感じでやってきてます。私のアイディアや思いを素材にしてもらって、多くの方に手伝っていただいて、自分が想像する以上の事件が起きた時には、本当に嬉しいですね。

時代や社会を面白く、
編集したいという気持ちがある

今、子連れで出勤しようという呼びかけも行っていますが、社会の課題を解決したいと信念を持って行動したというよりは、こんなこともあるけれど、面白くない？と投げかける感じが、私にはびびります。その結果、提案したことが社会に伝わり、変化の兆しが見え始めると、嬉しいのです。

今、モーハウス本社では一日約15人くらいのスタッフとともに、4、5人の子どものたちが一緒にいる。それが私たちの職場の普通の風景になっています。授乳しながら会議に参加する時もあります。かつては日本も農村社会でした。家族で働いている時には、父親も母親も一緒に働き、その場に子どもが一緒にいるのは当たり前だったはずなんです。でも、かつては普通だったことが、今の私たちの社会では、なぜ出来ないのだから

済フオーラム(北京)の中でお話したことにも重なりますが、授乳をしていても授乳しているように見えない授乳服や、授乳しながらでも仕事ができるワークスタイルの提案を通じて、みなさんと一緒に考えたいことは「自由」ということなんです。お母さんの子どもへの授乳という行為をきつかけにして、男女別なく多くの方が、それまでの思い込みや自分たちで作りに上げてきた制約から一旦、解放放たれて、ぜひ自由になってほしいと思っています。授乳のことを考えると、行動半径が狭くなってしまうたり、外出が億劫になってしまったり、外出がお母さんも多いのです。でも、外出先で出会う方々の、子どもをみるまなざしの優しさに触れることもとても大切なことだと思います。

また、職場に子どもがいることで、多くの大人が忘れていた、素直な笑顔の素晴らしさ、子どもの持つ幸福力にあらためて気がついて欲しいと思います。多くの大人にとって、子どもの存在は時として秩序を乱し排除すべき存在になることもありますよね。それは子どもには罪はないと思うのです。おっぱいが多い人々の気持ちを楽にして、自由にして、そして、あらためて社会とつながるきつかけとなって欲しいと心から願っています。



(文・船木成記)